広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学研究紀要 XIX 2007. 3. 25

中国と日本の小学校音楽科における教育内容の構成の比較研究

—90年代以後の「大綱」・「標準」・「学習指導要領」と教科書の分析を中心に—

呉　　非
（本講座大学院博士課程後期在学）

Ⅰ　研究の目的と方法

中国では、1949年に建国してからソ連の教育体制を模倣し、音楽科のカリキュラムが制定された。文化大革命の当時の音楽科教育は、音楽科の教科としての系統性が破壊され、音楽を通して政治的教育と政治的音楽活動のための技術主義教育が行われた。その後の音楽科教育は、依然として道徳教育と知識習得を偏重する傾向があった。1986年の「義務教育法」の実施により、「美育」（音楽・美術・演劇・舞踊）の1つの科目とされた音楽科は初等教育の必修科目になった。

90年代に入り、改革開放による経済の開放に伴い、学校教育においても、道徳や技術の習得を中心とする教育から、子どもの個人能力や社会への適応性を高めることを重視する教育へと変貌してきた。中国においては2001年に、日本の小学校学習指導要領に相当する小学校音楽教学大綱が義務教育音楽課程標準へと変更され、新たな音楽科の教育目的、内容、領域が定められた。日本においては、平成10年に第7期の学習指導要領が告示された。両国では、それぞれの音楽課程標準と学習指導要領音楽科に基づき、新たな教科書が出版された。このように、音楽科の教育改革は理論から実践へと全面的に進められてきた。本研究では中国と日本の90年代と2000年代の小学校音楽科の国定カリキュラムと教科書の分析を中心として、両国の音楽科教育内容の相違を解明し、また、両国の90年代以後の音楽教育改革の特徴と問題点を取り上げることを目的とする。

まず、92年に制定された音楽教学大綱と2001年に制定された義務教育音楽課程標準、また日本の平成元年と平成10年に改訂された学習指導要領を学習領域と内容の変化について比較し、分析する。また、両国の1992年と2005年に出版された小学校音楽教科書の単元構成、教材数、及び学習内容の3つの側面から考察する。

中国の人民音楽出版社と日本の教育芸術社の教科書を、対象とした。以下、1992年出版の中国の小学校音楽科教科書と2005年出版の中国の小学校音楽科教科書を、それぞれ92年版と05年版と表記し、平成3年出版の日本の小学校音楽科教科書と平成17年出版の日本の小学校音楽科教科書を、それぞれ3年版と17年版と表記する。

Ⅱ　研究の概要

1　90年代以後の「大綱」・「標準」・「学習指導要領」の比較

1）学習領域について

90年代以後の「大綱」・「標準」・「学習指導要領」の内容は表1にまとめた。

表1　90年代以後の「大綱」・「標準」・「学習指導要領」の内容

	学習領域	学習内容
92年版	歌唱、唱遊、器楽、鑑賞、読譜と視唱聴音	**歌唱**：歌唱の姿勢、発声方法、合唱、表情豊かで歌う、強弱、速度の変化の表現 **唱遊**（低学年のみ）：音楽の情緒、リズム、拍子に合わせて即興的な身体表現、音楽での遊び、歌表現、踊り

		器楽：打楽器、(選択の学習簡易な民族楽器、口琴、リコーダー、鉄琴)、演奏の姿勢と方法、合奏、伴奏 鑑賞：音楽の情緒、演奏形態、声の分類、中国の民族音楽の特徴、音楽の速度、拍子、音色、オーケストラの知識、作曲家の生涯 読譜：音符、各演奏記号、拍子、調の認識、リズムの組み合わせ、リズムと旋律の創作 視唱聴音：旋律音程の模唱、音階の模唱、音高弁別、八度以内の旋律音程と和声音程の弁別、八度以内の旋律と二部合唱の楽譜の視唱、主音感と調感の把握
2001年版	体験と鑑賞、表現（歌唱、器楽、総合的な芸術表現)、創造、音楽と関連文化	鑑賞：自然と生活の音、音楽の強弱、速度、拍子、主旋律の変化、楽器の音色、音楽の情緒、演奏形態、音楽のジャンル、音楽の特徴 歌唱：歌唱の姿勢と発声方法、正しいテンポと音高で歌う、強弱と速度の変化で歌曲の情緒を表す、合唱 器楽：打楽器での伴奏、合奏、演奏方法、器楽の演奏に参加する 総合的な芸術表現：身体表現、音楽の遊び、踊り、ロールプレーイング 創造：音を探す、楽器を作る、即興的な身体表現、短歌、詩、音楽で表現する、音楽遊び、物語を作る、音楽を聴いて絵と図を書く、リズムと旋律を作る 読譜：音符、休符、演奏記号、歌唱教材での読譜 音楽と関連文化：音楽と他芸術（身体表現、色、線で聴いた音楽の違いを表現する、音楽が劇、踊り、映画の中の役割を知る)、音楽と他教科（音と自然、日常生活の関連を知る、身体表現、物語、詩のための背景音楽を選択する、違う歴史時代、地域、国の童謡を知る)、音楽と社会・生活（日常生活の音楽を聴く、マスコミの音楽を聴く、地域社会の音楽活動を参加する)
平成元年版	表現、鑑賞	視唱・視奏：階名での模唱、暗唱、リズム譜の視奏、ハ長調、イ短調、ヘ長調、ニ短調の旋律の視唱・視奏、 歌唱：歌唱方法、発声、呼吸の仕方、頭声的発声、曲想と音楽の要素を表現する、歌詞の表す情景と気持ちを想像して表現する、音の重なりを感じ取って合唱する 器楽：演奏方、ハーモニカと打楽器、オルガン、リコーダー、拍の流れ、音色、強弱、速度、和声の響きやフレーズを感じ取って演奏したり、身体表現したりする。 創作：リズムや旋律を作る、旋律や音の組み合わせを工夫する、音を探して表現する、音の重なりや曲の構成を工夫して表現する、自由的な発想で即興的に表現する 鑑賞：リズム、旋律、速度、主な旋律の反復と変化、副次的な旋律、和声、楽器の音色、人の声の特徴、楽器の音色の組み合わせ、楽曲の気分、曲想の変化、 読譜：音符、休符、演奏記号
平成10年版	表現、鑑賞	視唱・視奏：階名での模唱、暗唱、リズム譜の視奏、ハ長調、イ短調の旋律の視唱・視奏 歌唱：歌唱方法、発声、呼吸の仕方、頭声的発声、曲想と音楽の要素を表現する、歌詞の表す情景と気持ちを想像して表現する、音の重なりを感じ取って合唱する

		器楽：演奏方、リズムと旋律を演奏する、拍の流れ、音色、強弱、速度、和声の響きやフレーズを感じ取って演奏したり、身体表現したりする。 創作：リズム遊び、音楽遊び、リズムや旋律を作る、旋律や音の組み合わせを工夫する、音を探して表現する、音の重なりや曲の構成を工夫して表現する、自由的な発想で即興的に表現する 鑑賞：リズム、旋律、速度、主な旋律の反復と変化、副次的な旋律、楽器の音色、人の声の特徴、楽器の音色の組み合わせ、楽曲の気分、曲想の変化

「大綱」では、歌唱、唱遊、器楽、鑑賞、読譜と視唱聴音の4つの学習領域があげられた。その中の唱遊は第1－2学年の児童が遊びの要素や体の動きを運用して音楽の活動を行うことである。「標準」では、音楽科における審美教育が重視されるために、鑑賞が体験と鑑賞へと変名され、音楽科の学習領域の首位に位置づけられている。また、歌唱、器楽、読譜、総合的な芸術表現が「表現」の1つにまとめ、さらに、「創作」と「音楽と関連文化」も独立した学習領域として取り上げられている。この学習領域の変化をみると、2001年の音楽科の教育内容は92年より広範になり、創造的で、総合的な音楽学習が強調されているといえる。日本では平成元年と平成10年版の学習指導要領ともに、学習領域は表現と鑑賞の2つに分けられ、変化していない。

2）学習内容について

歌唱について、「標準」では表情豊かに歌うのような曖昧な内容が削除され、「正しいテンポと音高で歌う」が加われ、歌唱を通しての視唱の学習がより重視された。器楽について、「標準」と「大綱」ともに、打楽器を中心にした演奏法、合奏、及び伴奏の学習内容があげられた。しかし、「標準」では器楽の演奏に参加することが学習内容として述べられてり、演奏技術の成長より、普及的な学習を強調している。鑑賞について、「標準」では作曲家の生涯、オーケストラの知識の内容が削除され、自然と生活の音、音楽の主旋律の変化、音楽のジャンル、音楽の特徴の学習内容が加われた。読譜と視唱聴音について、「大綱」の内容はより複雑で、専門的に訓練される傾向がある。「標準」では視唱聴音の内容が削除され、歌唱の学習を通して、読譜と視唱の能力を高めることが目指している。

「大纲」と「標準」の学習内容を比較すると、歌唱、器楽の学習内容は大きく変化していないことがわかった。しかし、「標準」は「大纲」より視唱聴音などの基礎的訓練の学習内容が減少し、創造的な音楽活動、音楽と他教科・領域の学習内容が増加した。また、鑑賞の学習内容において、「標準」は「大纲」より、音楽知識の伝授が弱体化され、音楽的内容の体験を中心として定められた。このように、2001年以降の音楽科の教育は90年代より、音楽の基礎知識が平易になり、創造的で体験的な学習内容が増加し、子どもの主体的な学習が重視されている。また、音楽科の教育内容は音楽科の内容にとどまらず、音楽と関連する他教科・領域の学習内容も含まれている。従って、中国の音楽科教育では子どもの音楽的成長を目的とせず、音楽の学習を通して子どもの視野が広がることを目指していると考えられる。

日本では、平成元年と平成10年の学習指導要領にあげられた学習内容は中国のように大幅に変化していない。しかし、平成10年の学習指導要領では、平成元年の読譜、ヘ長調とイ短調の視唱・視奏、及び鑑賞領域の和声に関する内容が削除された。また、創作の学習でにおいては、リズム遊びと音楽遊びが加われた。このように、日本の音楽科教育は音楽の基礎知識が平易になり、音楽遊びなどの学習活動を通して学習の興味・関心を育てることが重視されている。

90年代以後の「大綱」・「標準」・「学習指導要領」の内容を比較すると、中国は日本より、歌唱、器楽の表現技能の学習内容が少なく、レベルが低いことが分かった。また、中国は日本より音楽と関連する他教科・領域の学習内容が充実している。

2　教科書の比較

1）教科書の単元（題材）構成について

中国の92年版の教科書においては、音楽科の教科の基礎知識を中心として、教材が選択され、学習内容は学年が上がるとともに、段階的に深まって進むように組織された。各単元の下に、大体、歌曲、読譜知識、綜合訓練、及び鑑賞の項目が含まれている。学年によって、みんなの踊り、音楽遊び、歌表現などの項目も加えられる。教科書の構成は完全に教科知識の訓練を中心として学習内容の構成されている。しかし、2005年の教科書においては、子どもの生活経験を中心として生活、自然、社会、及び他芸術の内容が示されている単元の主題を定められた。

日本において、平成3年版と平成17年版の教科書とも学習のひとまとまりを題材として教材が選択され、組織されている。しかし、平成3年版の教科書において、題材の主題名は「重奏と合奏」と「ヘ長調とイ短調」のように、音楽の学習内容に即して、定められている。また、平成17年版の小学校音楽科教科書において、低学年にでは、児童の実態が考慮され、音楽の学習内容が「遊び」と「友達づくり」のような児童の日常生活経験に結びつけられており、「リズムにのってあそぼう」などの題材テーマが設定されている。中学年と高学年では、「遊び」、「友達づくり」などの表現用語が題材名から削除され、より深い音楽学習の内容に即して題材が構成されている。

このように、日本の平成3年版と平成17年版ともに音楽科の学習内容そのものに即して構成されている。ただし、平成17年版では小学校音楽科の題材は子どもの心理的な発達状況に配慮した上で、音楽の学習内容に即して題材構成されている。また、中国の92年版では音楽科の教科の基礎知識を中心に学習単元が構成されているが、2001年版では音楽学習以外の内容、あるいは子どもの生活経験に即して学習単元が構成されている。このことによって、中国の2001年の音楽教育改革において、音楽科教育は教科中心カリキュラムから経験主義カリキュラムへと転換されたといえる。

表２　中国の小学校音楽科教科書における単元（題材）構成

	1992年版	2005年版	平成3年版	平成17年版
構成単位	単元	主題による単元	題材	題材
構成の方法	音楽の学習内容	自然、生活、社会、他芸術	音楽の学習内容	音楽の学習内容

2）教材について

教材の比較については、歌唱教材、鑑賞教材、器楽教材、器楽と鑑賞が一体化された教材、歌唱と器楽が一体化された教材、踊りのための教材、踊りと歌唱が一体化された教材の7つのカテゴリに分類した。その内、2つの音楽学習活動が一体化された教材については、授業において、1つの学習活動のみを学習目的とはせず、また音楽学習の補助的な手段としては用いず、2つの音楽学習活動ともに学習目的であり、さらにどちらも主要な学習手段であると示している。

92年版と2005版教科書においては、両者とも鑑賞教材の数が最も多く掲げられている。当時の教学大綱においては、器楽が1つの学習領域として取り上げられているが、92年版の教科書において、器楽の学習を中心とする教材は1曲もない。当時の器楽学習は歌唱や鑑賞、また、視唱のリズム伴奏として行われた。それに対して、2005年版の教科書の中に、器楽教材は15曲が挙げられ、全教材数の3.4%を占めている。この変化によって現在の中国の音楽科教育において、器楽教育は以前より重視されるようになったといえる。しかし、日本の器楽教材数と比較すると、器楽教育未だ十分に展開されていない状態であることがわかった。また、踊りの学習を中心とする楽曲も音楽中国の音楽科教材の中に含まれている。この表を見ると、中国の鑑賞教材が教科書全体に占める比率は日本のそのものより多くみられる。しかし、器楽の学習を中心とする教材は日本より少ないと見られる。

表3　中国と日本の教材の分類

教科書	歌唱	鑑賞	器楽	器楽と鑑賞の一体化	歌唱と器楽の一体化	踊り	踊りと歌唱	合計
92年版	99（44.8%）	112（50.6%）				5（2.3%）	5（2.3%）	221
2005年版	186（42.2%）	227（51.5%）	15（3.4%）		6（1.4%）	3（0.7%）	4（0.9%）	441
平成3年版	89（49.7%）	36（20.1%）	32（17.9%）	2（1.1%）	20（11.2%）			179
平成17年版	65（41.1%）	49（31%）	24（15.2%）	4（2.5%）	16（10.1%）			158

3）学習内容について

この4つの教科書の中に記述された学習内容を表3のように整理し、音楽的学習内容を音楽的要素、音楽的感情、音楽の表現技能、音楽的文化の学習という4つのカテゴリに分類した。また、音楽以外の学習は全部非音楽的な内容にまとめた。

表4　中国と日本の小学校音楽科教科書における学習内容の比較

<table>
<tr><th></th><th>92年版</th><th>05年版</th><th>平成3年版</th><th>平成15年版</th></tr>
<tr><td rowspan="2">音楽の要素</td><td colspan="4">リズム、旋律、拍子、長調、短調　楽器の音色、声の分類、音楽の演奏形態</td></tr>
<tr><td>調性、和音の進行</td><td></td><td>調性、和音の進行</td><td>和音の進行</td></tr>
<tr><td>音楽的感情</td><td colspan="4">音楽の気分、情緒。音楽の感情的変化と音楽の表現要素の関連</td></tr>
<tr><td rowspan="3">表現技能</td><td colspan="4">発声方法　合唱、輪唱、リズム伴奏</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3">旋律楽器の伴奏　合奏</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2"></td><td>オーケストラの演奏</td></tr>
<tr><td rowspan="3">音楽的文化</td><td colspan="3">西洋作曲家と自国の作曲家の生涯</td><td rowspan="3">自国の作曲家の生涯</td></tr>
<tr><td colspan="2">作品の社会的背景と意義</td><td></td></tr>
<tr><td></td><td>西洋音楽の歴史</td><td></td></tr>
<tr><td>非音楽的な内容</td><td>舞踊、</td><td>舞踊、自然、生活、他国の文化、人間関係</td><td colspan="2">自然、他民族の文化</td></tr>
</table>

音楽の要素の学習においては、この4つの教科書の中で、同様にリズム、旋律、拍子、短調、楽器の音色、声の分類、演奏形態などの内容が挙げられている。しかし、中国においては、調性と和声の進行についての知識は92年版の教科書の中に一旦挙がられたが、2005年版の教科書から削除された。また、日本において、平成17年版の教科書の中に和音の進行の内容が保留されているが、ヘ長調とニ短調の内容が必修内容から削除されている。このように、中国、日本ともに、音楽の要素の学習内容が平易になったとみられる。

音楽的感情の学習内容は4つの教科書おいては、中国と日本ともに、音楽の気分、情緒、及び音楽の表現要素の関連にまとまって、大きな変化と区別が見られない。音楽の表現技能の内容について、されに、音楽的文化について、92年版の教科書においては、作曲家の生涯、作品の社会的背景と意義が挙げられている。また、2005年版の教科書にはバロックの音楽歴史の内容を加えられた。日本においては、平成3年版の教科書では西洋作曲家と日本の作曲家の生涯が挙げられているが、平成17年版の教科書では西洋作曲家の生涯が削除されている。このように、音楽的文化の内容中国の音楽科教育において幅広くなっている一方、日本の音楽科教育において減少されている。

非音楽的内容について、2005年版の教科書には最も多くみられる。このことは中国の音楽科教育が教科中心のカリキュラムから経験主義的なカリキュラムへの転換のであるからだといえる。日本の教科書において、非音楽的内容には自然、他民族の文化に関する内容が含まれており、大きく変化されていない。

Ⅲ　まとめ

上記の分析によって、中国は日本より音楽的文化の内容、音楽と関連する他教科・領域、の学内容、及び生活経験に関する内容が充実している。しかし、器楽学習の教材数が非常に少なく、内容が日本のものより平易であり、充分に展開されていないとはいえる。さらに、和音などの音楽の基礎的知識が音楽科の学習内容から削除され、視唱・視奏の内容も課程標準に削除された。このように、器楽学習や、合唱の学習はより深めて進める可能性が少ないと推測できる。

中国においては、改革開放以前(1949 － 1977)中の教育は基本的に政治と技術と中心する社会本位的な教育体制である。当時の音楽教育も愛国主義教育と知識伝授を中心に行われた。また、86年したがって、中国の音楽科教育は学習内容が幅広くなり、子どもが音楽の学習を通して生活の視野が広がるとともに、基礎的な知識と技能の学習が平易であるために、学校音楽教育を通して、音楽的表現能力を高めることができない可能性があると考える。

参考文献

・中国人民音楽出版社『義務教育九年一貫制音楽教科書教師用指導書』(5) 2005
・中国人民音楽出版社『義務教育九年一貫制音楽教科書教師用指導書』(6) 2005
・中国教育部基础教育司音乐课程标准研制组『音乐课程标准解读』北京师范大学出版社
・教育芸術社 『小学生の音楽3』指導書研究編　2005
・野村幸治、中山裕一郎 「中国の学校音楽教育の現在－「音楽教学大綱」(小学版)及び90年代の音楽教科書(小学版)の分析を中心に」『日本教科教育学会誌』20 (2) 1997　pp.39-48
・西園芳信 『小学校音楽科カリキュラム構成に関する教育実践学的研究:「芸術の知」の能力の育成を目的として知』風間書房　2005
・呉 非 「中国と日本の小学校音楽科カリキュラムの比較研究－1947年から2001年までの国定カリキュラムを中心として」『広島大学音楽文化教育学研究紀要』(XⅦ) 2005　pp.51-57